

[野菜部門]

9. 夏秋雨除けトマトの施設内資材の消毒によるトマトすすかび病の発病遅延効果

[要約]

夏秋雨除け栽培トマトのすすかび病発生圃場では、資材に付着した病原菌が越冬し、次作の第一次伝染源となる。汚染された資材を消毒処理すると、翌年のトマトすすかび病の発病が抑制される。

[担当] 岡山県農林水産総合センター農業研究所 病虫研究室

[連絡先] 電話086-955-0543

[分類] 技術

---

[背景・ねらい]

県中・北部の雨除け栽培の夏秋トマト産地では、近年、すすかび病の発生が顕在化し、感染時期や多発要因が不明なことから、的確な防除ができていない。そこで、第一次伝染源を解明するとともに、ハウス内の主な資材の消毒処理が翌年度の圃場での発病に及ぼす影響を検討する。

[成果の内容・特徴]

1. トマトすすかび病は、6月下旬以降に発生が拡大するが、病勢進展に伴ってすすかび病菌分生子が誘引紐、支柱、かん水チューブ、ハウス天井ビニル、ハウスサイドのマルハナバチネットなどの資材に付着する。付着数は、特に、トマトに直接接触する資材に多い（図1）。
2. 資材に付着した分生子は次作の作付時まで生存し、資材から分離したすすかび病菌はトマトに病原性が認められる（データ省略）。
3. 農業資材の定植前イチバン乳剤散布または定植後のダコニールジェットによる葉かび病防除ハウス内くん煙処理は、資材上に残存しているトマトすすかび病菌分生子の発芽を抑制する（表1）。
4. トマトすすかび病菌に汚染されたハウス内資材（ハウス外張りフィルム、ハウスサイドのネット、鉄パイプ、ワイヤー、誘引用支柱、誘引紐、かん水チューブ）を消毒すると、圃場でのすすかび病の初発生が遅延し、特に10月の発病程度が軽減される（図2、図3）。

[成果の活用面・留意点]

1. 本病が多発した圃場の資材はできるだけ更新した方が望ましい。
2. 資材を保管する場合は屋外での保管が望ましいが、土壌伝染性病害が伝染しないように土のはね返り等衛生環境に配慮する。
3. 圃場内に残存した前作の罹病残さも伝染源となるので、残さの除去を徹底する。
4. イチバン乳剤を用いた資材消毒処理は、栽培期間中に行わない。
5. ダコニールジェットは密閉した施設で処理を実施する。なお、本剤はトマト葉かび病に登録がある（平成27年1月現在）。
6. 本法は二次伝染を防止できないため、定期的な薬剤防除による二次伝染防止に努める。

